

研究テーマ	[ V 造形教育の広がりを考える ] 国語科で培った言語能力や言語活動の経験を活用した鑑賞指導 — 中学 1 年生「見ることと描くこと」の実践を通して —
-------	---

桜川市立大和中学校 教諭 中澤 吉巳

1 研究テーマについて

平成 20 年 1 月の中央教育審議会の答申で、「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。」と示された。

また、「各教科等においては、このような国語科で培った能力（記録，要約，説明，論述といった言語活動を行う能力）を基本に，…例示省略…それぞれの教科等の知識・技能を活用する学習活動を充実することが重要である。」と示された。

これを受け，平成 20 年 3 月に公示された学習指導要領美術科「B鑑賞」の内容を，「学習の方法」という観点から整理してみると，第 1 学年では「作品などに対する思いや考えを説明し合う」，第 2 学年及び第 3 学年では「作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合う」という「言語活動」として示された。（※下線筆者）

学習指導要領国語科では，各領域の内容を(1)の指導事項に示すとともに，(2)の言語活動例を通して指導することを重視している。

この内容(2)は，社会生活に必要とされる発表，案内，報告，編集，鑑賞，批評などの言語活動を具体的に例示したもので，例えば，第 1 学年「書くこと」の言語活動例に，「関心のある芸術的な作品などについて，鑑賞したことを文章に書くこと。」とあるように，美術科「B鑑賞」と関連付けて指導することができる。

以上のようなことから，美術科「B鑑賞」における言語活動を充実させる手だての一つとして国語科で培った言語能力や言語活動の経験を活用しようと考えた。

2 実践例 第 1 学年（平成 24 年 6 月実施）

- (1) 題材名 見ることと描くこと（鑑賞）
- (2) 題材目標と言語活動

題材目標	題材目標に迫るための言語活動
作品からイメージする物語を説明し合い，それらを肯定的に認め合う活動を通して，鑑賞への興味・関心を高める。 (関心・意欲・態度)	○「5W1H」の視点で作品を捉え，イメージする物語を肯定的に説明し合う。
作品を見て気付いたことや考えたことなどを互いに言葉で説明し合う活動を通して，分析的・探究的に作品を捉え，作品の見方や感じ方を広げることができる。（鑑賞の能力）	○イメージの根拠を，絵に描かれたものの中から明確に示し，互いの考えを論理的に説明し合う。

(3) 題材について

① 題材観

本題材「見ることと描くこと」では，ただ漠然と作品を見るのではなく分析的・探求的に作品を捉えることを重視する。そのためには，生徒に鑑賞の視点をもたせることが必要である。そこで，国語科第 1 学年の次の単元と連携する。

○単元名 分かりやすく書こう（東京書籍「新編新しい国語 1」）
○単元目標 伝えたい事実や事柄を分かりやすく説明することができる。











この国語科の単元は「書くこと」の基本技能を身に付ける学習である。東京書籍「新編新しい国語 1」には，分かりやすく書く方法として「時間の経過に沿って説明する」，「項目を立てて説明する」，「5W1H（いつ，どこで，だれが，なにを，なぜ，どのように）を押さえて説明する」，「比較して説明する」の四つが提示されている。

この国語科での学習は，学習指導要領美術科「B鑑賞」第 1 学年の内容に示された「作品などに対する思いや考えを説明し合う」という学習に活用することができる。

本題材「見ることと描くこと」では、国語科での既習事項「5W1Hを押さえて説明する」型を活用する。「いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どのように」という鑑賞の視点をもたせることで、分析的・探求的に作品を捉えられるようにする。

② 生徒観

研究対象の生徒にアンケート調査を行ったところ、グラフ1のような結果であった。

グラフ1：研究対象学年へのアンケート調査		1年生 54名 (H24. 6月実施)
Q1. 美術の作品鑑賞が好きですか？	Q2. 美術作品を鑑賞するポイントは？	
好き  7人	技法のうまさ  21人	
どちらかといえば  12人	とくにない  15人	
どちらでもない  25人	色やデザイン  8人	
あまり  7人	作品の主題  7人	
嫌い  3人	その他  3人	

Q1「美術の作品鑑賞が好きですか？」に対しては、肯定的な意見、否定的な意見とも少なく、「どちらでもない」と答えた生徒が46%を占めている。鑑賞への興味・関心を高める必要がある。

Q2「鑑賞するポイントは？」に対しては、「技法のうまさ」という答えが39%と最も多く、作者の心情や表現意図など不可視なものにまで意識が向いていない。また、「とくにない」という答えも28%と多く、ただ漠然と作品を見ている実態がうかがえる。多様な視点で作品を捉えられるようにし、作品の見方や感じ方を広げる必要がある。

③ 指導観

マサチューセッツ美術大学アビゲイル・ハウゼンとニューヨーク近代美術館の共同研究によれば、鑑賞者は大まかに次の5段階（見方が深化するプロセス）に分けられる。

(1) 物語の段階… 作品を見て、自分自身の物語をつくる。美術鑑賞の経験の少ない者は年齢にかかわらず、全てこの段階に属する。
(2) 構築の段階… 好き嫌いだけでなく、アートの本質を考え始める。美術に関する知識や情報を自主的に欲するようになる。
(3) 分析・分類の段階… 理論と理性で作品を見ようとする。
(4) 解釈の段階… 美術史、技法等の知識があり、自分の主観や、感性を駆使して鑑賞できる。
(5) 創造の段階… 作品と遊ぶかのように深い思索ができる。

本題材では、生徒（中学1年）の発達段階を「物語の段階」と捉える。作品を鑑賞し、描かれたものを自分なりに意味付け、解釈し、そこからイメージする物語を説明し合うことで、自分一人では気付かなかった価値などに気付くことができるようにする。

物語をイメージする際、描かれたモチーフとは全く別の物語、例えば自分の好きな漫画のストーリーなどと安易に結び付けてしまうことがないように、鑑賞の視点をもたせる。この鑑賞の視点に、国語科の既習事項である5W1H（いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どのように）を活用する。作品に描かれたことを5W1Hに応じて具体的な言葉で整理させることで、ただ漠然と作品を見るのではなく、分析的・探求的に作品を捉えることができるようにする。

また、他者と意見を交流する場面では、自分のイメージの根拠を明確に示させることで、論理的に自分の考えを説明できるようにする。美術の歴史や作者に関する知識などを集めて作品を語る（＝受身的な鑑賞）のではなく、目の前にある作品の中に根拠を求め、自分の言葉で作品を語ること（＝能動的・創作的な鑑賞）の楽しさを味わわせる。

(4) 資料・準備

・ワークシート（別添資料1） ・複製画5点 ・美術館レポート（別添資料2）

(5) 指導と評価の計画（国語科4時間＋美術科1時間＋休日を利用した美術館での鑑賞）

時間	形態	学習内容	■評価の視点〔評価方法〕
4時間	国語	伝えたい事実や事柄を、5W1Hを押さえて分かりやすく説明する。（単元名：分かりやすく書こう）	

10分	個人	①絵を鑑賞する。 ②絵に隠された物語をイメージし、5W1Hを押さえて記述する。	■ 作品に描かれたものを5W1Hを押さえてリスト化し、そこからイメージする物語を記述することができたか。 〔ワークシート ※別添資料1〕
20分	グループ	③ワークシートの記述をもとに、自分がイメージした物語を説明する。 ④互いの考えを説明し合い、質疑応答により、グループとしての考えをまとめる。	■ 作品からイメージした物語を、根拠を明確に示しながら説明することができたか。〔観察・対話・自己評価〕 ■ 互いの考えを論理的に説明し合うことで、作品に対する見方や感じ方を広げることができたか。 〔自己評価・アンケート・観察・対話〕
15分	全体	⑤グループの考えを発表し、全体で話し合う。	
5分 事後	個人 個人	⑥自己評価を行い、感想を書く。 ⑦休日を利用して美術館へ行く。作品を鑑賞し、レポートにまとめる。	■ 「5W1H」の型を活用し、作品からイメージする物語を肯定的に説明し合うことで、鑑賞への興味・関心を高めることができたか。〔自己評価・観察・対話・レポート ※別添資料2〕

(6) 実践の検証

生徒の観察（録画）や対話から、次のような生徒の姿（生徒の姿1～4）を見取ることができた。

また、授業後にアンケート調査を行ったところ、P4・グラフ2のような結果であった。



生徒の姿1 = 作品に描かれたものを5W1Hを押さえてリスト化している。そこからイメージする物語をワークシート（別添資料1）に記述している。



生徒の姿2 = 作品からイメージした物語を楽しそうに説明している。描かれたものと結び付けて、イメージの根拠を明確に説明している。



生徒の姿3 = グループの中で互いの考えを活発に交流している。他者の気付きに対して、共感や驚きを含んだ発言をしている。見方や感じ方の広がりを感じられる。



生徒の姿4 = グループで出た意見をまとめ、全体に分かりやすく説明している。肯定的な雰囲気の中で活発な質疑・応答が行われ、分析的・探究的に作品を見ようとしている。

グラフ2：研究対象学年へのアンケート調査		1年生 54名 (H24. 6月実施)	
Q1. 作品に対する見方や感じ方を広げることができましたか？		Q2. 美術作品を鑑賞するポイントは？	
できた	████████████████████	描かれた内容	████████████████████ 21人
だいたい	████████████████████ 15人	作品の主題	████████████████████ 15人
あまり	████████ 4人	色やデザイン	████████████████████ 11人
できない	0人	技法のうまさ	████████ 2人
		その他	████████ 4人
アンケートの自由記述欄に書かれた生徒の声			
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 話し合うことで、皆が納得する絵の物語をつくることができた。</li> <li>○ 考えを説明し合うことで、より説得力のある考えになった。</li> <li>○ 同じ絵を見ても、イメージすることは人それぞれ違うと思った。</li> <li>○ 作品に対する思いや考えを言葉にするのは難しいが、友達の考えを聞くのは楽しい。</li> <li>○ 5W1Hの視点が他の作品でも使えるか、いろいろな作品を鑑賞してみたい。</li> </ul>			

(7) 検証結果の考察

生徒の自己評価では、93%の生徒が「できた・だいたいできた」と回答した。

休日を利用した美術館での鑑賞では、研究対象の1年生 54名全員が美術館を訪れ、レポート(別添資料2)を提出した。レポートの内容を見ると、自分の言葉で作品を解釈したものが多く、主体的な鑑賞活動への興味・関心の高まりが感じられた。

美術作品鑑賞のポイントについてのアンケート結果を、事前(P2・グラフ1)と事後(P4・グラフ2)で比較してみると、事前は、「技法のうまさ」という回答が多く、表現技能のほうに視点が向いていた。事後のアンケートでは「描かれた内容」や「作品の主題」という回答が多く、作者の心情や表現意図など不可視なものにまで鑑賞の視点が広がっている。

見方や感じ方の広がりや、分析的・探求的に作品を捉えようとする意識の変化は、事後のアンケートやレポートに書かれた生徒の感想からも読み取ることができた。

3 成果と課題

(1) 成果

ア 国語で培った言語能力や言語活動の経験を美術科で活用することで、学習指導要領美術科「B鑑賞」に示された「作品などに対する思いや考えを説明し合う」という言語活動を充実させることができた。

イ 作品を鑑賞して自分が感じたことや考えたことを、具体的な言葉で整理する活動を通して、生徒が分析的・探求的に作品を捉えることができるようになった。

ウ 作品を鑑賞して自分が感じたことや考えたことを、根拠を明らかにして説明し合う活動を通して、作品の見方や感じ方が広がり、生徒が多様な視点で作品を捉えることができるようになった。

エ 自分の言葉で作品を語ることの楽しさを味わうことで、主体的に美術作品を鑑賞しようとする態度が養われ、休日に美術館を訪れる生徒が増えた。

(2) 課題

美術科には、特別な意味をもつ語句や、特有の言語表現があり、これらの指導は国語科の範囲ではなく、美術科が責任をもって指導する内容である。しかし、国語科で扱った内容を美術科で活用したり、国語科における指導の成果を美術科の指導に生かしたりすることで、指導の効果はより高まると考える。

今後の課題として、言語活動を得意としない生徒に対する継続的な支援の必要性があげられる。その際、国語科との連携を基本としながらも、全教科、領域での幅広い連携によって、日常的に支援の充実を図っていくことが重要である。

そのためには、連携の在り方についての具体的な検討が必要である。例えば、各教科等の年間指導計画の中から言語活動の場面を抽出し、一覧できる資料の作成等が考えられる。

こうした資料を活用することで、他教科や領域で使用している教材やワークシート等を言語活動の必要な場面で利用(教科・領域間の連携)したり、他教科の教師とのティームティーチング(指導者間の連携)で授業を計画したりといったことが可能になると考える。